

オーラー・エト・ラボーラー

(一テサロニケ五・一七、四・一一)

「神學是信心經歷的反省(神學とは信仰經驗の反省である)」とは恩師の金言。確かにそうだ。有限な人間がそもそも無限の神について、純粹に客觀的かつ科学的な論述など出来るわけがないし、無限の神の啓示の前にひれ伏し、その力と知恵を読みとつていくには信仰と敬虔が不可欠だ。そう考えると礼拝であれ、洗礼であれ、聖書であれ、キリストであれ、聖靈であれ、宣教であれ、教会形成であれ、何であつてもあらゆる神學的言述においては敬虔と經驗、更にはそこから来る反省を欠いてはならないのだ。先日もしふれたが、正しい反省なき教理的主張は往々にして相手を打ち負かすための「道具」になつてしまふが、それではいけない。反省しすぎでよくよするのとはよくないが、無反省なままではそもそも信仰が成長する筈もないのだ。そういうわけで、本年最後の礼拝において私たちも自らの信仰のあり方を、年初に立てた標語、「祈る教会、働く教会」にそつて反省し、深め、更に来年の歩みにつなげたいと願つている。

一、祈る教会

年初の礼拝において、この個所の前後に出てくる「喜び」や「感謝」に比べると「祈る」ことは習慣化しやすいものであることを述べた。またその結果はあの「炎のランナー」のモデルであるエリック・リデルのように人を神中心の人間に造り変えるものである事を述べた。そして私たちは今年継続的な祈りの生活に取り組んだ。また教会内においてはリジョイスや集会の前後に必ず祈る時間を持つようにした。その結果、今年は四名の姉妹達が聖靈の満たしの体験をする事が出来た。

これは素晴らしいことである。祈りに取り組んで本当に良かったと思う。だがこのことは本来「一年限定」であるべきことではない。何せ絶えず、間断なく祈らねばならないのである。こう述べているのはパウロだけではない。私たちの信仰の創始者にして完成者であるイエスご自身は、祈りの習慣を大切にしていたし、更にルカ一八・一以下ではいつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるためにたとえ話で語るシーンがあるほどである。そう考えると「年が改まつたから、もういいや」といつて祈らなくなるのは愚の骨頂だ。祈ることは、再臨のその日が来たるまで、地上の教会において伝えられるべき使命なのだ。イエスも言っているではないか。

「私の家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる(マルコ一・一七)」と。

二、働く教会

同じく年初の礼拝において、主にあつてそれぞれが、それぞれの場所でよく働くことが勧められ、同時に教会の中でも恵みをスプーンフィードで受け取るだけでなく、積極的に奉仕を担い、受けた恵みを押し流すことが示された。実際に今のベテル教会を見ると、兄弟姉妹達の中には主のために喜んで奉仕を担う思いが着実に育ち、実を結び始めているのを感じている。このような思いは牧師だけが感じる所ではない。現に最近の来会者カードなどを見ても「ほつこりした教会」とか「居て嬉しい」とか「皆さんの優しさに感動した」とか「平安な気持ちになつた」などと言う感想が並んでいる。つまり外の人に対して証しが立っているということである。

一テサロニケ四・一二は新改訳では「外の人に対してりっぱにふるまうことが出来」となるが、NIVを日本語にすると「あなたの日常生活が外の人の尊敬を勝ち取るようになる」となり、これの方が原意に近いと考えられる。私たちが教会の内外でやるべきことを心を込めて、丁寧に行う時、私たちの愛の労苦は覚えられ、時間がかかるかもしれないが、人の心を勝ち

取つていくことが出来るのである。実際こうしたしつかりした日常に根ざさなければ、美辭麗句を並べてイエス・キリストについて語ろうともそれはおしつけがましいものには聞かえないものなのだ。

* * *

「祈り、働け」で検索をかけると出てくるのはなんと盤ゲーム(?!)。なんでもドイツの名ボードゲームデザイナー、ウヴェ・ローゼンベルク氏(誰?)による傑作であり、実際高い評価を得ているようだ。このゲーム、その名の通りにゲームが修道院長になつて、そこを發展させていくゲームなのだそう。その商品説明には「最後に勝つのは祈り(羅・Ora)と労働(羅・Labora)で最も神様に奉仕出来たプレイヤーだ」とあつた。勿論私たちの人生のレースは人と比べて優劣を競うという種のものではない。しかし自分の持てるものを神に捧げ、祈りと奉仕に忠実に励んだ者は、その励みだけだ分だけ神の栄光のために捧げることが出来るというのは厳然たる事実だ。林勝兄のことを思い起こそう。彼の信仰は、誰あろう彼自身がそれを物語つているのだ。「祈る教会、働く教会」この標語は今年でおしまい。しかし私たちの祈りと労働の日は永遠だ。Ora et Labora.